

【研修報告】日本史サマーセミナー

神奈川工業高校（定時制） 加藤 将

1、はじめに

2015年8月19日、20日の2日間、県立柏陽高校を会場として日本史研究推進委員会主催の日本史サマーセミナーが開催され、柏陽高校の生徒だけでなく、県内各高校の高校生も参加した。今年度の日本史サマーセミナーでは、最先端の歴史学研究成果を取り入れながら、高校生に「日本の近現代史をどう教えるか」をテーマに大学と高校教育関係者による授業が2日間行われた。初日の19日は、成田龍一先生（日本女子大学）と大串潤児先生（信州大学）から、2日目は、矢野慎一先生（柏陽高校）、児玉祥一先生（同志社大学）による講義が行われた。紙面の都合上、成田龍一先生と大串潤児先生の講義を中心に、4名の先生方の授業の概要をまとめながらサマーセミナーの報告を行いたい。

2、成田龍一（日本女子大学）『大正デモクラシー』はなぜ、戦争を防げなかったか

テーマ1 『大正デモクラシー』とは、どのようなデモクラシーであったか。

テーマ2 『大正デモクラシー』はなぜ、戦争を防げなかったか。

はじめに、1つ目のテーマである『大正デモクラシー』とは、どのようなデモクラシーであったか。』について講義された。「大正デモクラシー」の期間やその前後の出来事の話では、「1905年から1931年であり、元号で言えば、明治の終りから昭和のはじめを指すこと」、日本史の出来事で言えば「日清・日露戦争からアジア・太平洋戦争の間にあること」を解説されていた。

その後、「デモクラシーの内容」について、「デモクラシーは、民主主義と訳せること」「デモクラシーの中身は民衆運動、政党政治であったこと」を話された。デモクラシーの中身では、登場する「民衆」の定義について、「普通の人々」を指すことを強調されていた。また、大正デモクラシーとは普通の人々、民衆が起こした行動、運動であることを解説され、民衆運動の具体的出来事として「日比谷焼き討ち事件」をあげられた。講義の中では、「普通の人々である民衆がなぜ不満を持ち、運動を起こした」のかを2つの原因から解説された。先生は、「日比谷焼き討ち事件」の原因を、1つに「(戦争による) 税負担増加や(戦後の) 講話内容に対する不満」、2つに「民衆たちが選挙権を有していないため、政治に自分たちの声(自己実現)を反映させるため起こした」と解説された。「日比谷焼き討ち事件」での行動が、後に「自分たちの声(自己実現)を反映させるための行動」として「米騒動」にも続いていくこととなったとも講義された。次に「大正デモクラシー」は、「民本主義の時代」と『改造』の時代の2つの時期に区分することができる、2つの時期区分を分ける出来事として「米騒動」「原敬内閣成立」があり、その出来事を隔てて、2つの時期区分ができると話された。まず、「民本主義の時代」について、知識人や学者と言われる、吉野作造や石橋湛山や平塚らいてうが雑誌などを通して、購読する層つまりは選挙権を有している人々などに対して「デモクラシー」を訴えた時期であったと解説された。次に、『改造』の時代』については、「米騒動」「原敬内閣成立」を経て、雑誌『改造』の創刊、民衆運動があたらしい展開を迎え労働運動・農民運動、全国水平社、新人会などの様々な団体が組織化、大山郁夫が政党政治の本格化に伴い政党を組織するなどし、従来の政治や社会を改めようとする動きが暴動という形でなく運動という形で民衆に広がっていった時期であると話された。

テーマ2 『大正デモクラシー』はなぜ、戦争を防げなかったか。』では、原敬内閣後に続く「政党政治」を中心に講義をされた。「政党政治」について、「政友会と民政党(憲政会)が政策を競争し交互に政権を握った時期」であることを講義後、「政党政治が実現できた理由は普通選挙の影響が大きい」

と解説された。また普通選挙は、当時日本の植民地であった台湾や朝鮮半島には適用されなかったことも話された。一方、植民地出身でも普通選挙が認められたケースが存在したことに触れられた。具体的には、植民地でなく日本国内に居住している台湾や朝鮮半島出身に対してであり、横浜に在住する台湾の人々には投票権が与えられたことや国会議員の中には、朝鮮半島出身者も存在しが、1945年、アジア・太平洋戦争後、日本国内に居住する台湾・朝鮮半島出身者の選挙権は、はく奪されたと解説された。普通選挙法1925年に成立したと同時に「治安維持法」も成立した。この法律は、「大正デモクラシー」で高まってきた民衆運動、労働運動・農民運動などを取り締まる内容が多く含まれており、普通選挙が開始されたが運動に関係してきた政党の議席は思うように伸ばすことができなかつたと解説された。

「大正デモクラシー」は、民衆つまりは「普通の人々」が起こした運動であったが、治安維持法や昭和恐慌、満州事変などに対するマスメディアの熱狂などを受け、「デモクラシー」つまりは「普通の人々の意見」が変化していくこととなり、その結果、「デモクラシー」が「戦争への道」を歩むこととなったとまとめられた。

3、大串潤児（信州大学）「民衆は、どのようにして兵士なるのか？」

信州大学の大串潤児先生は、「民衆は、どのようにして兵士になるのか？」をテーマに講義された。「はじめに」では、大学の史学概論、歴史学入門などの講義される歴史学の基礎的な考え方について話された。講義では、「歴史を考えるととは？」との疑問を投げかけ、「自分のなかの『問い』（問題意識）を見つけよう。」そのためには、1『『いま、ここ』の問題を大切にしよう。現代社会のなかでの『疑問』』、2「史料から考えてみよう。歴史的事実（あるいは史料・記録）からの『疑問』」、3「自分なりの歴史像をつくってみよう。」が大切であるとした。そこで、「いま、ここ」現在でも、イラク・アフガン戦争、「子ども兵士」などが存在すること、日本では自衛隊は存在するけど、民衆が直接、「兵士」にはなっていないが過去には経験していることなど、現在や身近なことから歴史を考えていく必要を話された。そこで本講義では、史料を通して「民衆は、どのようにして兵士になるのか？」を考えていくこととなった。

続く講義では、「Ⅰ．戦場の兵士の『日記』を読んでみよう。」とのテーマで平出一源『遠山部隊従軍日記』を読んだ。日記は、1937年7月に盧溝橋事件が起こり日中戦争へと進んでいく時代である。そのような時代の8月、日記の人物に召集令状が届いた。華北戦線に出動する人物の日記を読み進めながら、民衆が兵士となる過程に迫っていった。日記からは、2つのことが読み取れる。1つに、8月14日に東京の中野に勤務地に動員が下り、荷物を勤め先に預け急ぎ出身地である長野県に帰省したこと、2つに、命令が届いて3日後の8月17日に入営し、帰省しても家族との別れに多くの時間を割けず慌ただしい中、入営していることである。入営翌日は、荷物の積み込みなどの準備が行われているが8月19日には兵営を出、沿道の人々に見送られながら一路、列車で大阪を目指し、各所で多くの差し入れをもらっている。日記に「小学生の日の丸の小旗を打ちふる姿には心打たれる。命をかけて戦うことの喜びさえ心にわきあがってくる。男に生まれた感激にひたる。」と記している。入隊し故郷から戦場へ赴く要所要所で様々な人々から激励や歓待、歓迎を受けることで、普通の人々が戦場に向かう「兵士」となること、戦場で戦う意識が芽生え形成されていった過程を日記から読み取れる。その後、日記の兵士は、大阪の個人宅で10日ばかり寄宿し歓待を受けた後、貨物船で中国大陸へ向かった。

次に、「Ⅱ兵士を送りだした『社会』を考える」とのテーマで講義がされた。兵士は、各地で激励などを受けたことで戦意高揚がみられることが分かった。一方、送り出した「社会」のどのような対応をしたのかを、見ていくこととなった。「社会」を見ていくために、日記以外の図像、写真、映像など

の史料を活用し多様な視点から社会を考えていく必要性が話された。まず、『銃後の街』に掲載された、兵士たちの様子、送り出す地域の様子が撮影された写真が提示された。「兵士を送り出す人々」の写真では、警察だけでなく憲兵が銃を構えて警戒にあたっている。人々の歓声の中、出征していく兵士を送り出す人々の後ろには、銃を構えた憲兵が控えていたこと、そのような中で社会が兵士を送り出したことが読み取れる。また、兵士を戦場へ送り出すことに、「社会」の中で大きな役割を果たした組織に「国防婦人会」がある。「国防婦人会」とは、1932年3月18日、大阪の女性たちが中心になって発足した「大阪国防婦人会」から広がった。大阪から広がった理由として、大きく3つが考えられる。1つに、中国大陸に赴く、多くの兵士が大阪港から戦場へ出動していったこと、2つに、急なことで準備ができていない兵士のために守り札や千人針を用意してあげたこと、3つに、慌ただしい中の召集で父母との袂別の挨拶がしっかりできていない20代の兵士にとって湯茶の接待、見送りや世話をしてくれる婦人が「母」のイメージを創りだしたことが大きかった。「国防婦人会」は、その後、大阪だけに限らず全国的に組織を拡大させた。「国防婦人会」が創りだしもの、拡大した理由は、1つに「母」と「割烹着」のイメージ、2つに台所や家庭を出て社会的活動を行う場を与えたこと、3つに着物の「愛国婦人会」への反発、4つに安い会費と陸軍のテコ入れなどが重なり、会員を大幅に伸ばした。また、市川房枝も「(前略)国防婦人会については、(中略)自分の時間というものを持ったことのない農村の大衆婦人が、半日家から解放されて講演をきくことだけでも(中略)婦人解放(中略)国防婦人会が村から村へ燎原の火のように拡って行くのは、その意味でよろこんでよいかもしれないと思った。(後略)」と大衆婦人が家から解放される機会を与えたことが拡大した要因の1つと書いている。

講義では、出征する兵士と送り出す社会、両者の視点から同時代を捉える講義が行われた。兵士は、各地で激励されることで戦意高揚が高まり、一番家庭に閉じこもりがちな「婦人」を社会の活動に参加させることで全ての人々、階層において総力戦体制に似せた空間を創りだした。社会全体を臨戦態勢に近い状況を創りだしたことが「民衆を兵士にした」理由なのではないか、と大串氏の講義を聴き感じた。

4、児玉祥一（同志社大学）「近代国家を創る 岩倉使節団がもたらしたもの」・矢野慎一（柏陽高校）「糸の近代史～幕末開港期の生糸輸出から在華紡まで」

児玉先生講義の中で、私が一番興味を持ったのは、「国民を創る」について話された内容である。岩倉使節団が、欧米諸国を視察した中で「国民を創る」必要性を感じ、そのためには「教育」が重要であると確認したことである。国家にとって「教育」というのが重要なことを児玉先生の講義からも改めて認識した。矢野先生の日本史「糸の近代史」からは、3つのことを学んだ。1つは、「糸」をテーマに神奈川という地域性を考えながら教材化すること、2つに資史料をもとに「問い」を立て生徒に考えさせる授業の工夫、3つに日本史の講義に際しても日本史という壁に捉われず「地理や世界史も視野に入れ、世界史の視野で日本史をみつめ授業」をつくることである。2人の先生の講義からも多くの学びと刺激があった。しかし、紙面の都合で詳細を書くことはできない。セミナーでは、多くのことが学べる。是非、今年度も開催されるセミナーに多くの方々が参加され、自らの五感で歴史学の最新成果を活かした講義を体感してもらえればと考える。